論　説

# 「孤立」してゆく単身超高齢者

## ――21 世紀のデータを前にして――

神　江　伸　介

はじめに
第一章　20 世紀から 21 世紀にかけての単身超高齢者の政治行動の変化
⑴　投　票
⑵　党派方向
第二章　SES 的特徴
⑴　性　別
⑵　持ち家
⑶　職　業
⑷　地　域
第三章　単身者の集団加入
第四章　単身者の政治コミュニケーション環境
⑴　単身者の言論による選挙運動との接触
⑵　単身者の文書による選挙運動との接触
⑶　単身者のメディアを通した選挙運動との関わり
⑷　超高齢単身者の強まる選管情報への依存
⑸　血縁・地縁・友人から離れ行く超高齢者
第五章　単身者の争点関心
⑴　単一争点派
⑵　その他の争点との関係
⑶　特殊な争点
おわりに

## はじめに

20世紀から21世紀になって，高齢者（3階層）[1]の量的増大などが論じられるが，高齢者（3階層）内部の構成が問題となることが少ない。まして，内部の問題がどのようにして社会，政治の問題につながってゆくかが議論されるのはまれである。[2]

老年学の分野では，「ひとり暮らしの高齢者」という言葉で，日本でも増えてきた高齢者（3階層）のある傾向を記述したものがある。家族の縮小により発生してくる単独世帯は「1980年に高齢世帯中の8.5%であったものが，2000年には14.1%，2006年には15.7%に増加」するという激変を見せるが，同時に日本ではそれら高齢者（3階層）との一般市民からの接触は諸外国と比べきわめて低いといわれている。[3]

21世紀の超高齢者は，種々の点でそのあり方が20世紀と異なっている。その点を量的な面で確認したい，というのが本論の第一の目的である。本論では，この高齢単身世帯を取り上げ，質的分析でなく量的分析を行う。更に，高齢者（3階層）一般ではなく60から69歳，70から79歳，80歳以上を取り上げて，60より下を非高齢者，以上を前期高齢者，70歳以上を高齢者，80歳以上を超高齢者と名づけて分類する。特徴づけは主に超高齢者においている。単身高齢者は，3代，2代，1代（高齢者夫婦のみ），そして一人というふうに解体していく究極の形を反映しており，まだ現在進行中である。その意識の形は現代高齢者の代表であるがゆえに分析するのに価値がある。

更に，超高齢単身者が各種政治行動でユニークな行動を示しえているかもはっきりさせないといけない。投票行動，SES的特徴，集団加入，政治



(1) ここでは，一般の高齢者を「高齢者（3階層）」と呼ぶ。高齢者は，すでに項目の中で使っているからである。

(2) この論文のこれまでの論文との違いは，新しい変数で1990年から一貫して聞かれている項目で，かつ2000年代のデータを加えたものを分析した。

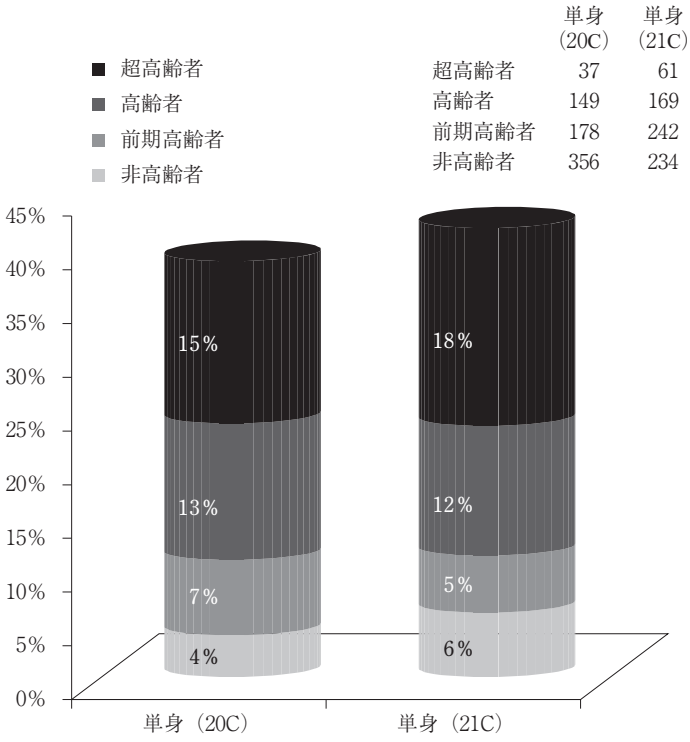
(3) 河合克義『大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立』（2009年）。

コミュニケーション上の環境，争点意識，について個別具体的にあきらかにしてゆかねばならない。

まず実数の面で確認しよう。

1．「**図1　単身超高齢者の孤立化傾向**」に示されている傾向は，「単身」のうち「超高齢者」と指示した部分が約3％伸びているという事実である。非高齢者を別として，高齢者（3階層）グループ内では唯一の伸びの傾向を見せている。

**図1　単身超高齢者の孤立化傾向**(4)




| | 単身（20C） | 単身（21C） |
|---|---|---|
| 超高齢者 | 37 | 61 |
| 高齢者 | 149 | 169 |
| 前期高齢者 | 178 | 242 |
| 非高齢者 | 356 | 234 |

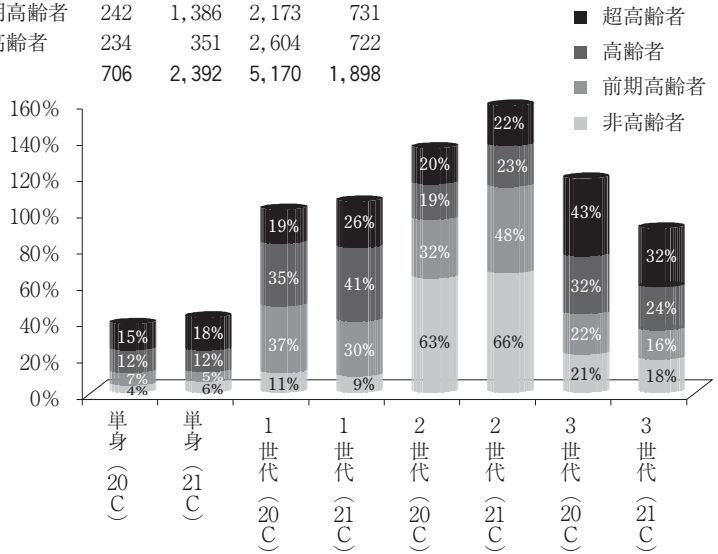
九六

(4)　データは明るい選挙推進協会。以下同じ。

2．「**図 2　単身超高齢者の孤立化傾向ー詳細**」[5]では，20 世紀データと 21 世紀データを超高齢者で比べてみると，3 世代同居のものが顕著に減り，2 世代同居＝核家族が増え，超高齢者夫婦のみを主とする「1 世代」同居において増え，そして単身超高齢者の増加と続くのである。

**図 2　超高齢者の孤立化傾向ー詳細**

| | 単身 | 1 世代 | 2 世代 | 3 世代 |
|---|---|---|---|---|
| 超高齢者 | 37 | 48 | 51 | 109 |
| 高齢者 | 149 | 414 | 233 | 380 |
| 前期高齢者 | 178 | 947 | 837 | 579 |
| 非高齢者 | 356 | 988 | 5,779 | 1,913 |
| | **720** | **2,397** | **6,900** | **2,981** |
| 超高齢者 | 61 | 86 | 75 | 109 |
| 高齢者 | 169 | 569 | 318 | 336 |
| 前期高齢者 | 242 | 1,386 | 2,173 | 731 |
| 非高齢者 | 234 | 351 | 2,604 | 722 |
| | **706** | **2,392** | **5,170** | **1,898** |






(5)　河合は，孤独が主観的なもので，孤立が客観的なものとしている。同書，69 頁。

## 第一章　20 世紀から 21 世紀にかけての単身超高齢者の政治行動の変化

ここでは投票と投票方向の二つの面に分けて論じてみる。

### ⑴　投　票

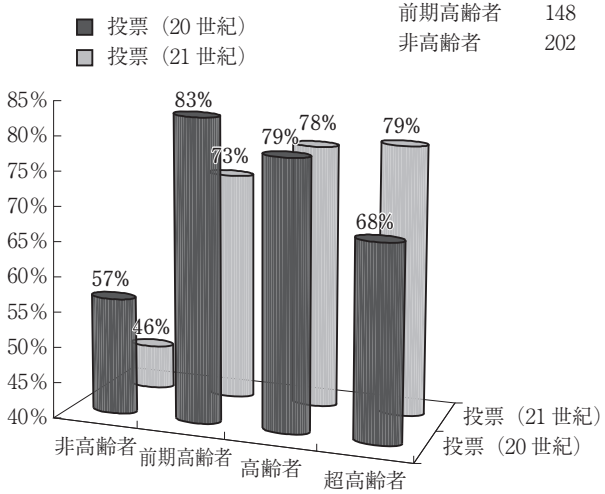
まず投票・棄権行動（「**図 3　単身者の投票・棄権**」）を見てみよう。

非高齢者から高齢者（3 階層）にかけての全世代に渡る投票・棄権の特徴を，20 世紀データでは持っていたが，21 世紀データになって変わっていった。

20 世紀には非高齢者と高齢者（3 階層）との間には夥しい違いがあり，図にみるように 26 ポイントも異なっている。次に前期高齢者と高齢者は人生で

**図 3　単身者の投票・棄権**

| | 投票（20世紀） | 投票（21世紀） |
|---|---|---|
| 超高齢者 | 25 | 48 |
| 高齢者 | 118 | 131 |
| 前期高齢者 | 148 | 177 |
| 非高齢者 | 202 | 106 |




九四

最も投票率が高い時期で83と79％を記録する。そして，超高齢者とここで名付ける時期になると，11ポイント低落する。形として，**逆U字型**（右側の長さ半分）という形であった。いわば，低投票率層を多く含む若年層を含め投票外関心が高い非高齢者層，投票経験の長さなどが累積し人生最高の投票率を誇る60歳代，70歳代が来，そして疎外感が昂じる衰退の超高齢者が来る。

21世紀になると，事情がすこし変わってくる。**図**では，投票に参加する者のうち，非高齢者と前期高齢者が下がり，高齢者が上がっている。前の現象は，全体としての投票率が下がっていることと，長寿化とともに前期高齢者が次第に非高齢者の列に編入されつつあることを示す。後の現象は，超高齢者の部分が跳ね上がり高齢者と全く同一となってしまった。超高齢者は，投票もするようになったのか。半分は真実で，半分は誤りであろう。長寿化し，高齢者と同じレベルで習慣的投票行動をしている，というのが第一点。しかし，果たして，それでは90歳代になれば，以前の80歳代の現象を示しているのか。いまの時点では何とも言えない。[(6)] いずれにせよ，この段階の形は，180°反転のL字型である。

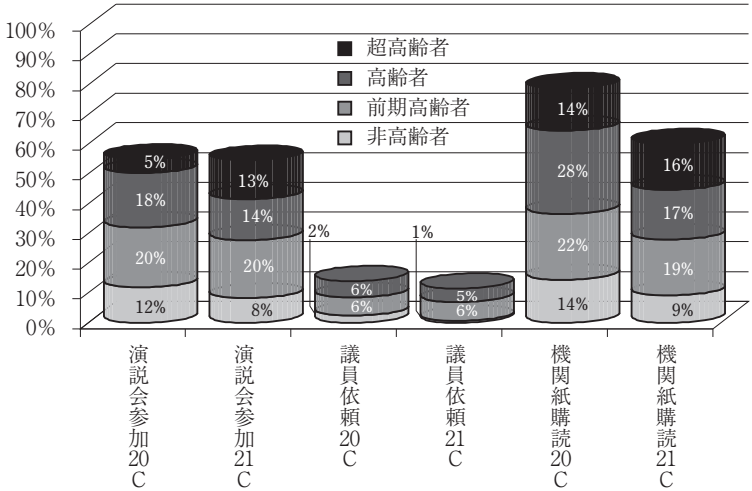
更に，投票以外の参加について「**図4　単身者の政治参加**」を次に見てみたい。そうすると一つの妙な傾向に気づく。演説会については，20世紀には12－20－18－5％と逆U字型であったのが，21世紀になると，8－20－14－13％という形で，辺ぴな形だが，逆L字型になっている。「議

(6) 因みに現在のデータで90歳以上の者を超々高齢者として区分すると，単身超々高齢者の数は，20世紀データで1名おり棄権，21世紀データで2名おり投票であった。そこで，まだ新しい分類で分析できないが，意外と想像外の傾向を単身超々高齢者は持っているのかもしれない。最高年齢があまり進まず，政治で関与している度合が年齢が高くなると，きわめて理想的な形である。ただ，多くの超々高齢者は，高い棄権率を持って「家族で」暮らしている。本号の「最近の高齢社会－高齢者の政治参加，ボランティアと生きがい」，ならびに80歳以上の現データにおける分析から，20世紀の80歳代と21世紀の80歳代が異なっているというところに長寿変数が働いているなどの全面的分析は今後の続稿にまつ。

(7) 議員依頼はほとんど政治参加としての意味をなさない。

**図 4　単身者の政治参加**

| | 演説会参加 20C | 演説会参加 21C | 議員依頼 20C | 議員依頼 21C | 機関紙購読 20C | 機関紙購読 21C |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 超高齢者 | 1 | 8 | 0 | 0 | 3 | 9 |
| 高齢者 | 13 | 23 | 4 | 5 | 19 | 28 |
| 前期高齢者 | 17 | 47 | 5 | 10 | 18 | 45 |
| 非高齢者 | 20 | 19 | 4 | 1 | 24 | 21 |




員依頼」を省略して「機関紙購読」を見てみよう。[7] 20 世紀に 14－22－28－14％だったものが，21 世紀では 9 －19－17－16％である。ここでも，今度は 20 世紀はきれいな逆 U 字型になっているのに対して，21 世紀になると，高齢者が相当落ち，超高齢者が少し値を上げることで前期から超高齢者までなだらか（逆 L 字型）になった。

このような，U 字型から逆 L 字型に変わった理由は，二つのファイルの半分の値である 7.5 年の間に平均寿命が延び，それに応じて超高齢者は高齢者の態度を持ちながら 80 歳代に競りあがったといえる。超高齢者はもはや 20 世紀の超高齢者とは異なる存在になったといえるだろう。

長寿変数のこの形態はあと数十年単位で，平均寿命を延ばしながら，まだ当分続く。

### ⑵　党派方向

次は，投票方向等の行動へ偏りをもつもの，いわば行動の内容を構成しているものである。まず，投票政党から接近してみよう。

**投票政党**

「**図５　単身者の投票政党**」を見ていただきたい。

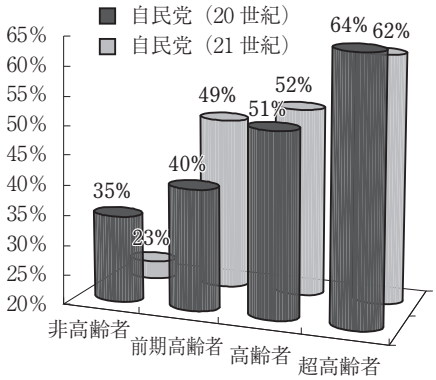
20 世紀と 21 世紀の違いは，20 世紀の場合単身者が加齢に従って自民党投票を加えてゆき（35～64％），その傾斜は激しいものがあるが，しかし前後をみると「漸増」というのが適切である。

21 世紀になると，まず，非高齢者と高齢者（３階層）との間に自民投票が 26 ポイント（20 世紀は僅かに５ポイント）もの差で広がるようになった（世代間差異）。更に，前期高齢者と高齢者との間がほとんど一致し，この二階層の間が自民支持で統一され，更に超高齢者が若干非自民化する形でその試行を終えている。

**政党支持**

これは投票政党である。棄権層などの指向を考慮に入れるため政党支持

**図５　単身者の投票政党**




| | 投票計（20世紀） | 投票計（21世紀） |
|---|---|---|
| 非高齢者 | 179 | 100 |
| 前期高齢者 | 124 | 158 |
| 高齢者 | 108 | 119 |
| 超高齢者 | 25 | 42 |

九一

を見てみよう。「**図６　単身者の政党支持の変化**」を見る。

自民党支持の高齢単身者の内，全員が自民党支持を減らす中で，超高齢者のみがその支持を５％と一番減らしている。

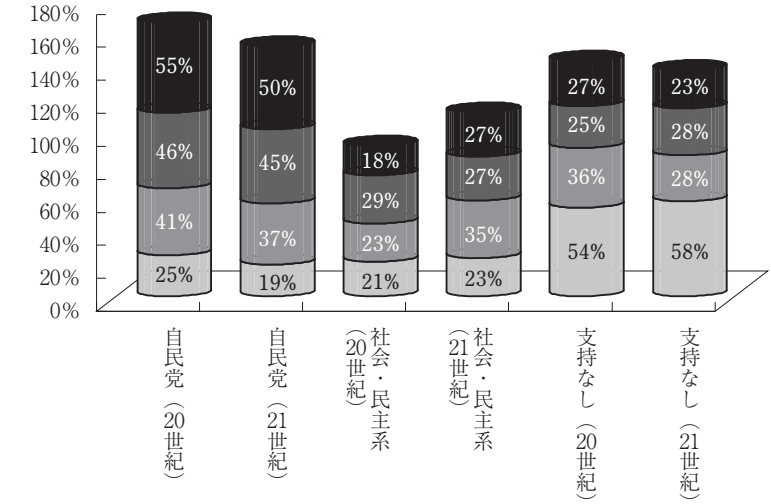
社会・民主系では，原則的には各層増やすわけだが，高齢者が逆に減らしているところに，超高齢者は９ポイント増やしている。

支持なしは，高齢者が３％増やしている中で，超高齢者は非支持なし化を選んでいる。非高齢者の場合，４％の支持なし化である。

以上まとめると，単身超高齢者の場合，他の高齢者を押しのけて自民であったが，最近社会・民主系的で，しかし非支持なしである。

**図６　単身者の政党支持の変化**

| | 自民党 20C | 21C | 社会・民主系 20C | 21C | 支持なし 20C | 21C |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 超高齢者 | 18 | 28 | 6 | 15 | 9 | 13 |
| 高齢者 | 65 | 73 | 41 | 43 | 36 | 46 |
| 前期高齢者 | 68 | 84 | 39 | 79 | 61 | 63 |
| 非高齢者 | 86 | 42 | 72 | 51 | 184 | 126 |




九〇

## 第二章　SES[8]的特徴

### (1)　性　別

ここでは，「**図７　超高齢者の孤立ー男性**」と「**図８　超高齢者の孤立ー女性**」に関係する。

**図７　超高齢者の孤立ー男性**

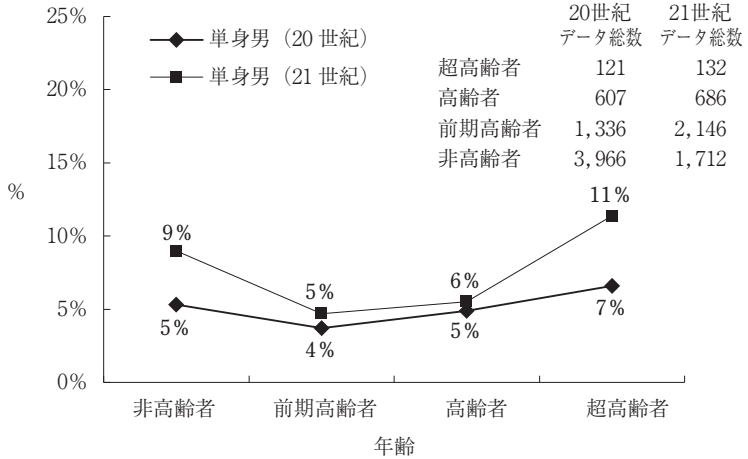
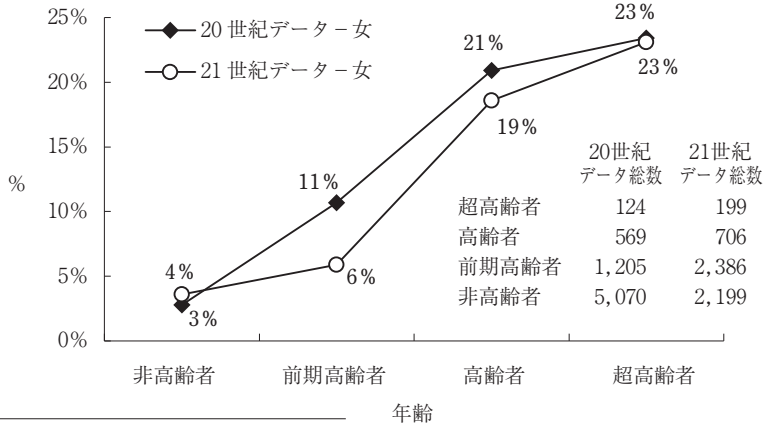



**図８　超高齢者の孤立ー女性**




(8)　Socioeconomic Status

１．単身男性は，20 世紀中では全年齢に渡って少なかった。

しかし，21 世紀になって，非高齢者が４％，超高齢者が４％と増えている。超高齢者について論ずるならば，長寿化とそれに伴っていない家族による包摂の積極性であろう。

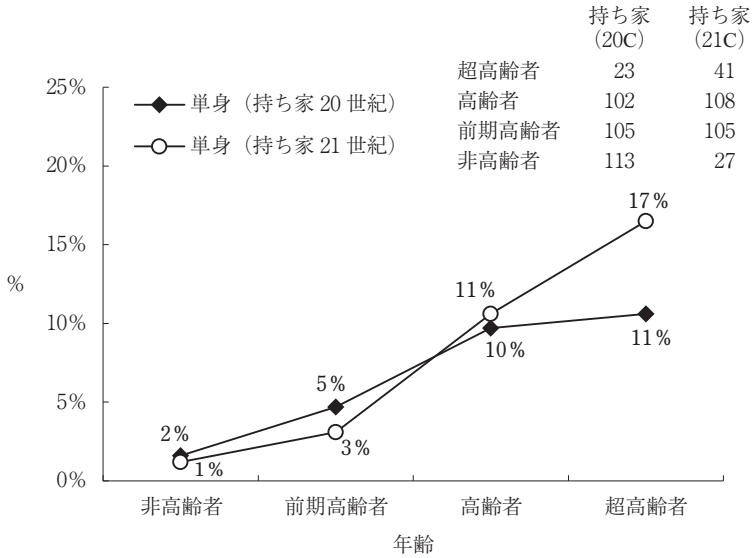
２．女子の場合，男女の平均年齢の違いによって，孤立問題は主に女子の問題であったことが分かる。

### ⑵　持ち家

「**図９　超高齢者の孤立ー持ち家**」と「**図 10　超高齢者の孤立ー借家**」に関係する。

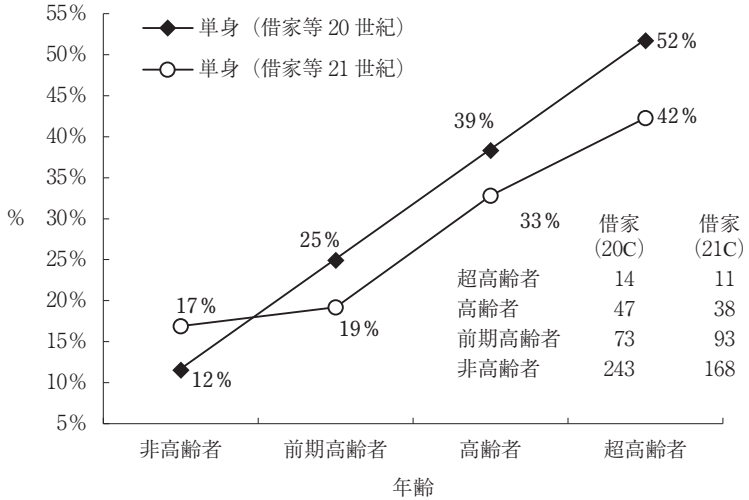
１．**図**によると，20 世紀時代には単身者が高齢になっても，１割くらいの低率で，持ち家をもたない傾向があったが，21 世紀になると６％も持ち家率が上がっている。

**図９　超高齢者の孤立ー持ち家**




八八

**図 10　超高齢者の孤立ー借家**




２．単身者の持ち家率の向上につれて，「**図 10**」にみるように，高齢単身者の借家率がさがってきている。

### ⑶　職　業

「**図 11　超高齢者の孤立ー無職**」と「**図 12　超高齢者の孤立ー有職**」に対応している。

１．多くの高齢者では無職であったし，加齢とともにそれは加速する。無職で単身住まいは，２割を切る程度で多くは家族等に囲われるわけだが，21 世紀データでは，さらに単身化を生んだ。

２．単身の有職の高齢者は 20 世紀データでは僅かに６－８－２％であったのだが，21 世紀になるととくに 70 歳以降（高齢者以上）に，単身高齢有職者が増えてきた。

**図11　超高齢者の孤立ー無職**

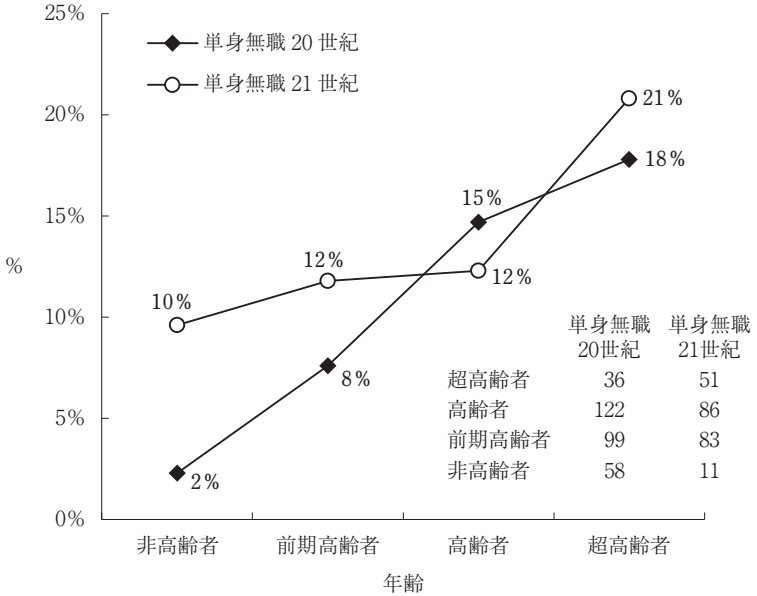
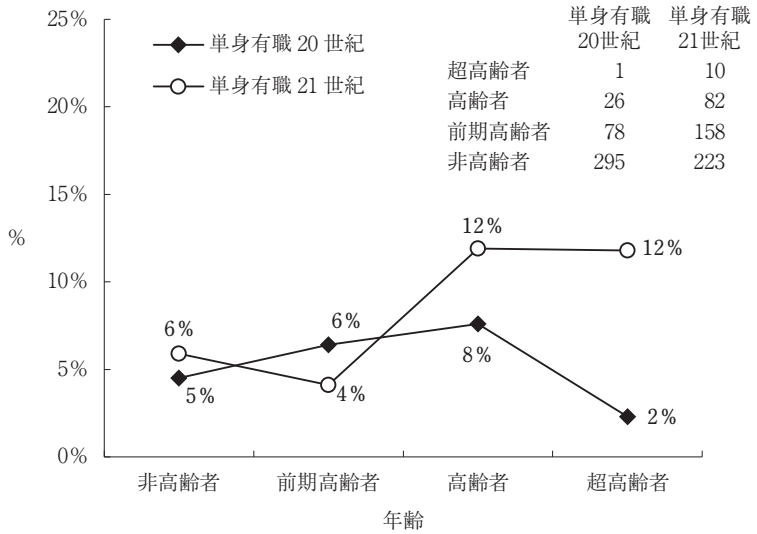



**図 12　超高齢者の孤立ー有職**




八六

### ⑷ 地　域

最後に，都市規模別単身者の変化を見てみよう。種類が異なるであろう，大都市別－郡部別に分けてみる。以下のようになった。

「**図 13　大都市単身者の変化**」では，非高齢者の単身者化傾向がみられるが，高齢者はほぼ 10％程度の割合で単身者化をしなくなっている。

「**図 14　郡部単身者の変化**」では，逆に高齢まで，何の傾向も現さないが，超高齢者になると，7ポイントの差を見せて今単身者化真最中というところである。大都市部で単身化が終わり郡部でいま進んでいるというべきか今後を見守りたい。

**図13　大都市単身者の変化**

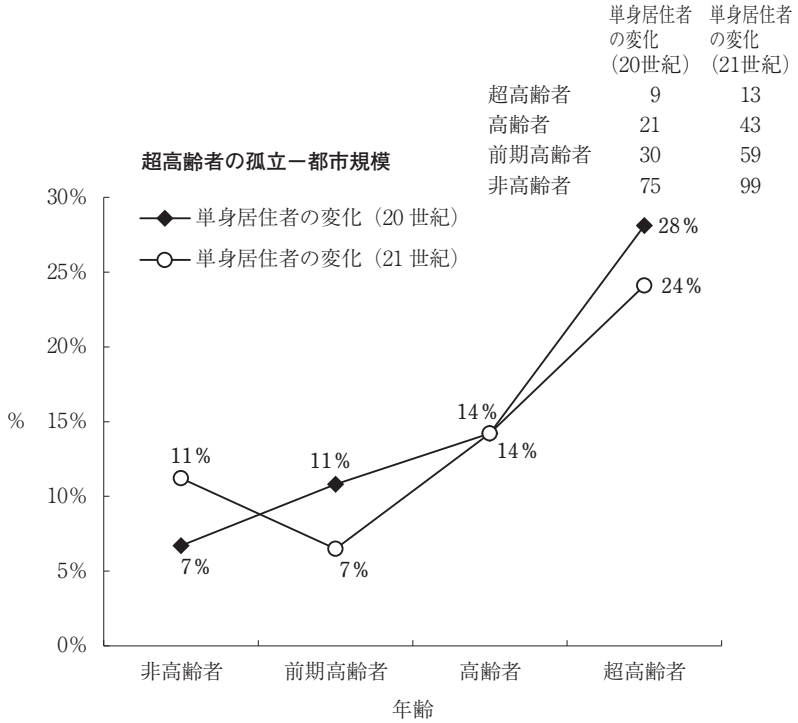
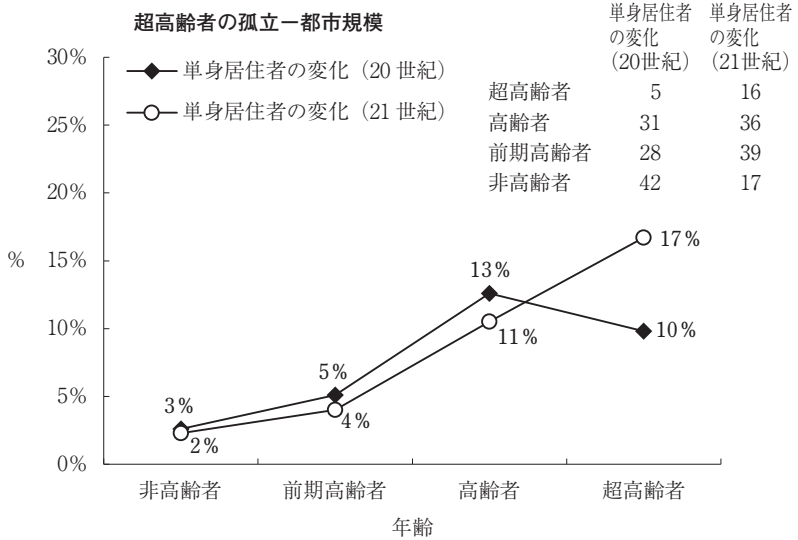


図 14　郡部単身者の変化




## 第三章　単身者の集団加入

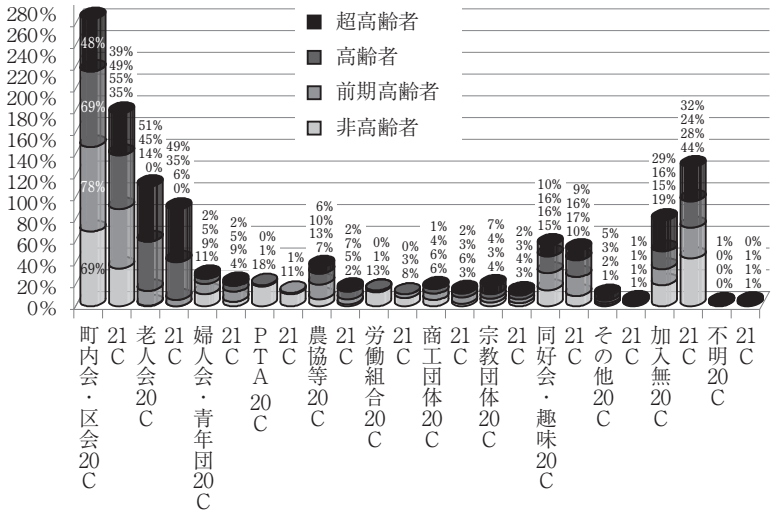
単身者はどのような集団に加入しているのだろうか？　それが，21 世紀になっても変わっていないかどうか。筆者は，「非高齢者がもっぱら加入する団体，高齢者が加入する団体，どちらも加入する団体」[(9)]があると指摘していた。この傾向は 21 世紀ではどうなったかというと，「非高齢者の団体」としての「PTA と労働組合」は，「**図 15　単身者の集団加入**」によれば，21 C の場合も殆ど変わっていない。「比較的高齢者が多いが非高齢者を含んでいる団体」で，農協はほとんど消滅寸前である。宗教団体は同じ数を保持している。「比較的非高齢者が多いが高齢者を含んでいる団体」として婦人会・青年団と商工団体などがあるが，前期高齢者を 60 歳代から数えたためか，若干高齢者が入ってきた。商工団体は変化はない。「非



(9)　拙稿「高齢社会の諸相⑤　高齢者の政治学」（『老年精神医学雑誌』　第 20 巻第 2 号，2009 年所収）212 頁。

**図 15　単身者の集団加入**

| 実数 | 町内会・区会20C | 21C | 老人会20C | 21C | 婦人会・青年団20C | 21C | PTA20C | 21C | 農協等20C | 21C | 労働組合20C | 21C | 商工団体20C | 21C | 宗教団体20C | 21C | 同好会・趣味20C | 21C | その他20C | 21C | 加入無20C | 21C | 不明20C | 21C |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 超高齢者 | 17 | 19 | 11 | 25 | 0 | 1 | | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 4 | 5 | 2 | 1 | 0 | 13 | 26 | 0 | 0 |
| 高齢者 | 83 | 63 | 41 | 63 | 5 | 14 | | 0 | 6 | 3 | 0 | 0 | 2 | 3 | 11 | 12 | 18 | 23 | 4 | 2 | 40 | 47 | 0 | 2 |
| 前期高齢者 | 115 | 90 | 14 | 14 | 12 | 12 | | 0 | 8 | 0 | 1 | 4 | 5 | 8 | 7 | 6 | 21 | 28 | 0 | 2 | 49 | 121 | 1 | 3 |
| 非高齢者 | 111 | 15 | 0 | 0 | 14 | 0 | | 2 | 2 | 0 | 49 | 12 | 9 | 6 | 12 | 11 | 41 | 21 | 3 | 1 | 182 | 172 | 6 | 4 |




高齢者も高齢者もともに入っている」団体として同好会・趣味の団体は，21 世紀に超高齢者を 14％から 3 ％に落としている（理由は分からない）。「町内会・区会」は，どの年齢層においても凋落が甚だしく，非高齢者・前期高齢者は約 30％，高齢者（3 階層）は高齢者・超高齢者とも 20％の低下である。なお，「加入無」は，非高齢者・前期高齢者ともに 20％強の低下で，超高齢者で 8 ％低下している。高齢者はほとんど変わらず，である。

このように，単身者において 21 世紀に地域団体を中心とした低下が加入無の決定的原因となっている。

そこで老人会に移るが，このグループでは高齢者・超高齢者とも３％のわずかな低下であり，地域団体が激落させているなかでの安定状態である。

老人会のみが強く超高齢者に，弱く高齢者に，与える影響がある。即ち，高齢者は35％から45％へと所属集団の他のカテゴリー（「加入無し」）で削減影響を与えるのに対し，それらの影響に対して超高齢者は「鈍感」（２ポイント）で・強健なボランティア組織であることを示している。

単身者と「家族等で」暮らしている者とを二つの項目で比較しておこう。地域団体では「家族等で」暮らす非高齢者が34％も激落させているのに対し，単身者は27％であった。一般に，地域団体の解体が非高齢者に先鋭に現れ高齢者（３階層）の順にしたがって弱く表れるものといえよう。「加入無」では，「家族等で」暮らす単身者が今度は漸減であり，超高齢者はほとんど変化はなかった（図略）。

## 第四章　単身者の政治コミュニケーション環境

### ⑴　単身者の言論による選挙運動との接触

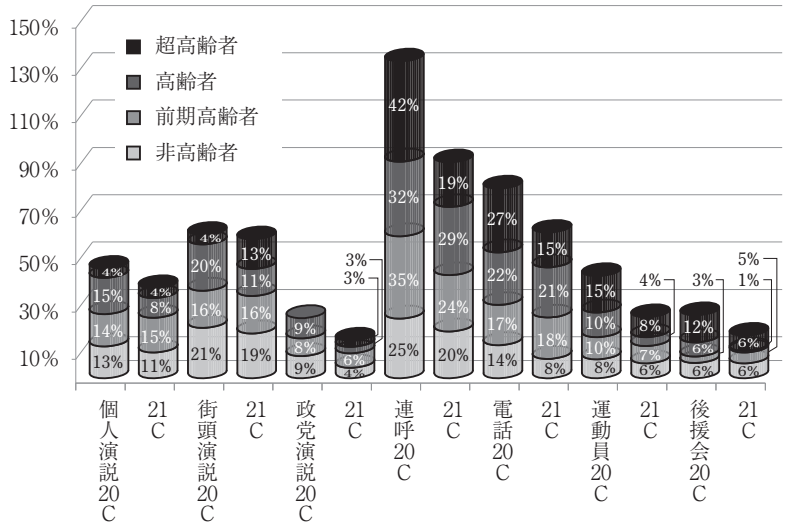
全体として，「**図16　単身者の情報接触ー言論**」によると，21世紀になって単身者に対しては言論による選挙運動はいくぶん低調になってきている。[10] 単身超高齢者にとって，仮に５ポイントで切ってみてそれを比較できるポイントとみて，低下したものは連呼＝△23，電話＝△12，後援会＝△６，一方上昇したものは，街頭演説会＝９上昇，である。

つまり，超高齢者は，他の階層ではほぼすべてが街頭演説会に接触を低下させているなかで，街頭演説会を一貫して歓迎している唯一の階層である。また，連呼・電話をほかのどの階層より毛嫌いしている人たちである。[11]

⑽　21世紀になって棄権者にも聞くようになったが，棄権者を20世紀には聞いていないので外した。

**図 16　単身者の情報接触ー言論（2000 年以降棄権者除外）**

| | 個人演説 20C | 21C | 街頭演説 20C | 21C | 政党演説 20C | 21C | 連呼 20C | 21C | 電話 20C | 21C | 運動員 20C | 21C | 後援会 20C | 21C |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 超高齢者 | 1 | 2 | 1 | 6 | 0 | 1 | 11 | 9 | 7 | 7 | 4 | 4 | 3 | 3 |
| 高齢者 | 18 | 11 | 23 | 15 | 10 | 3 | 37 | 38 | 26 | 28 | 12 | 5 | 7 | 1 |
| 前期高齢者 | 20 | 26 | 23 | 28 | 11 | 9 | 51 | 42 | 25 | 31 | 14 | 13 | 4 | 8 |
| 非高齢者 | 27 | 12 | 43 | 21 | 19 | 4 | 51 | 22 | 28 | 9 | 16 | 7 | 13 | 7 |




### ⑵　単身者の文書による選挙運動との接触

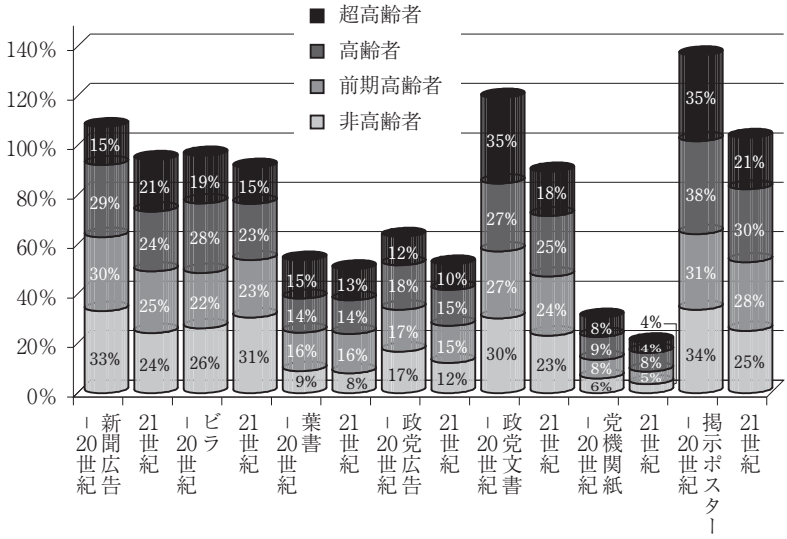
ここでも，単身者は，全体として 21 世紀になると，20 世紀に展開されていた運動を超える項目はない（「**図 17　単身者の情報接触ー文書**」）。単身超高齢者にとって，20 世紀より 5 ポイントを超えて低下した項目は，ビラ＝△5，政党文書＝△17，掲示ポスター＝△14，であり，逆に高くなったものに新聞広告＝5，がある。

八一　目も悪くなってあまり長い文書や高いところに掲示してあるものは読めないのでビラ，ポスター，が嫌がられることは分かる。その代わりに，他

⑾　もちろん，80 歳以上になると，耳が聞こえにくくなり，意味を持っていない「連呼」は忌避の対象でしかない。

**図 17　単身者の情報接触ー文書**

| | 新聞広告 20世紀 | 21世紀 | ビラ 20世紀 | 21世紀 | 葉書 20世紀 | 21世紀 | 政党広告 20世紀 | 21世紀 | 政党文書 20 世紀 | 21世紀 | 党機関紙 20世紀 | 21世紀 | 掲示ポスター 20世紀 | 21世紀 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 超高齢者 | 4 | 10 | 5 | 7 | 4 | 6 | 3 | 4 | 9 | 7 | 2 | 2 | 9 | 10 |
| 高齢者 | 34 | 32 | 33 | 30 | 16 | 18 | 21 | 16 | 32 | 27 | 11 | 10 | 44 | 39 |
| 前期高齢者 | 44 | 44 | 33 | 41 | 23 | 28 | 25 | 22 | 40 | 35 | 11 | 9 | 45 | 49 |
| 非高齢者 | 67 | 27 | 53 | 34 | 18 | 9 | 34 | 11 | 61 | 21 | 12 | 4 | 68 | 28 |



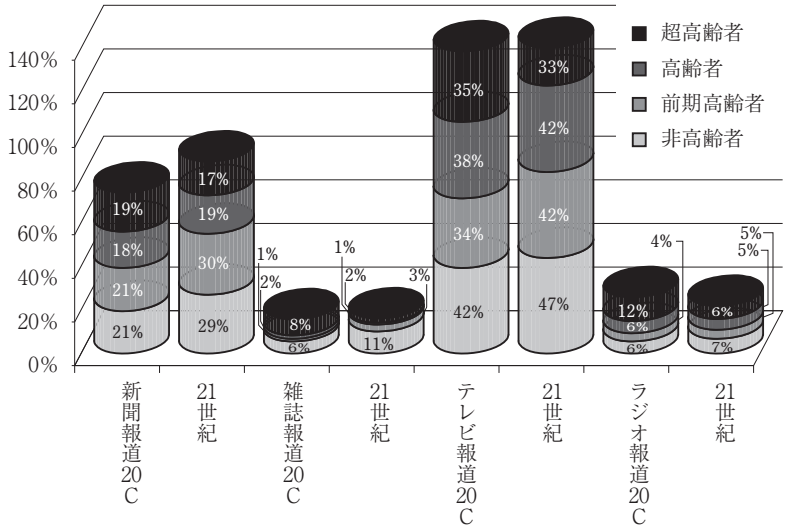

の三階層が減らしている中で，新聞広告が重要な代替物となっていることが示される。

### ⑶　単身者のメディアを通した選挙運動との関わり

全体として単身超高齢者は視聴が低下する傾向がある。なかでも雑誌報道＝△６，ラジオ報道＝△５，が目立っており，それに対して新聞報道とテレビ報道はわずかな低下であった（「**図 18　単身者の情報接触ーメディア**」）。しかし，新聞とテレビは，新聞が非高齢者と前期高齢者で，テレビが前期高齢者と高齢者で目覚ましい成長をすることによって選挙運動の様子を一変させているのに対し，さほど超高齢者は劇的なメディア政治の変

**図 18　単身者の情報接触ーメディア**

| | 新聞報道 20C | 21世紀 | 雑誌報道 20C | 21世紀 | テレビ報道 20C | 21世紀 | ラジオ報道 20C | 21世紀 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 超高齢者 | 5 | 8 | 2 | 1 | 9 | 16 | 3 | 3 |
| 高齢者 | 21 | 25 | 2 | 1 | 44 | 56 | 7 | 7 |
| 前期高齢者 | 31 | 53 | 2 | 6 | 50 | 75 | 6 | 8 |
| 非高齢者 | 42 | 32 | 12 | 12 | 85 | 52 | 12 | 8 |




化には加担はしていない。

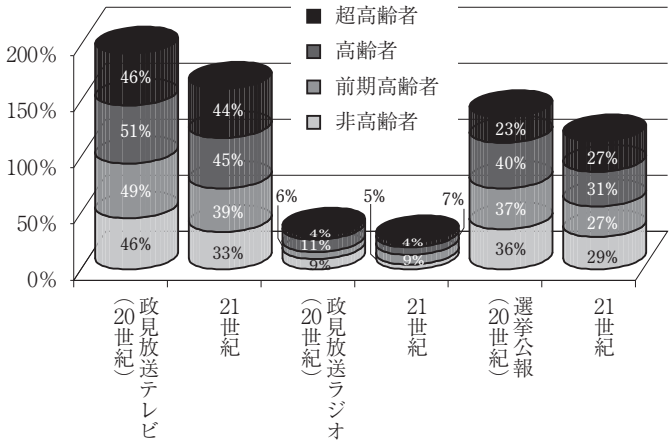
### ⑷　超高齢単身者の強まる選管情報への依存

丁度 80 歳より若い単身有権者がメディア依存を強めてゆくのに対し，選管関連の情報は超高齢者の依存を示していた（「**図 19　単身者の情報接触ー選管等**」）。政見放送テレビは超高齢者の場合 21 世紀になっても 2 ポイントのダウン（他の層は 10 近くのダウン），選挙公報が 4 のアップ（他の層は 10 近くのダウン），であった。

七九

**図 19　単身者の情報接触ー選管等**

| | 政見放送テレビ（20世紀） | 21世紀 | 政見放送ラジオ（20世紀） | 21世紀 | 選挙公報（20世紀） | 21世紀 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 超高齢者 | 12 | 21 | 1 | 2 | 6 | 13 |
| 高齢者 | 60 | 59 | 13 | 9 | 47 | 41 |
| 前期高齢者 | 72 | 69 | 9 | 15 | 54 | 48 |
| 非高齢者 | 92 | 37 | 19 | 5 | 72 | 32 |



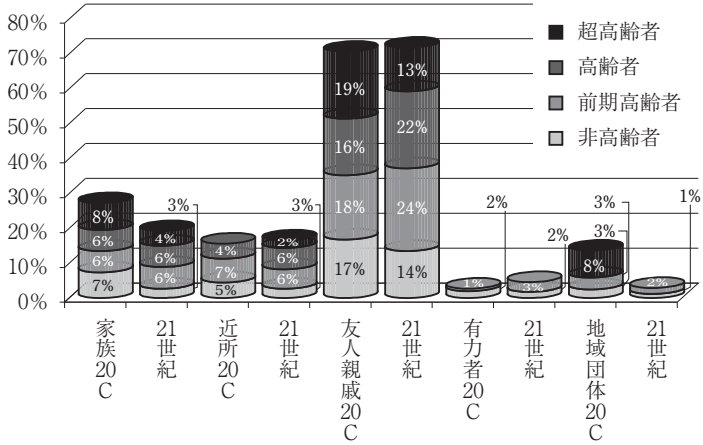

### ⑸　血縁・地縁・友人から離れ行く超高齢者

単身者はその定義から「血縁・地縁・友人」から物理的に離れて暮らしているが，その実態は非高齢者か高齢者（3階層）かによって，また高齢者の年齢によって異なるであろう。一人で暮らす独身時代，二人以上で暮らす時期，そして子供が独立するなどして二人に戻り，最後に一人に戻り，そのまま一人で暮らすか，家族等の集団に戻るか，の時期があろう。個人主義と集団主義の二原理が混在する時期は非高齢者時代であって，他方高齢者（3階層）時代は定義上個人主義をその到達点としているので，年齢とほぼ一方向的に合致する。「**図 20　単身者の情報接触ー1次関係**」の友人親戚関係を見ると，20世紀データでは超高齢者は他の3集団に劣

七八

**図 20　単身者の情報接触―1 次関係**

| | 家族 20C | 21世紀 | 近所 20C | 21世紀 | 友人親戚 20C | 21世紀 | 有力者 20C | 21世紀 | 地域団体 20C | 21世紀 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 超高齢者 | 2 | 2 | 0 | 1 | 5 | 6 | 0 | 0 | 2 | 0 |
| 高齢者 | 7 | 8 | 5 | 8 | 19 | 29 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 前期高齢者 | 9 | 11 | 10 | 10 | 27 | 42 | 1 | 5 | 5 | 3 |
| 非高齢者 | 15 | 3 | 9 | 3 | 34 | 15 | 4 | 2 | 5 | 1 |




らず選挙情報接触をしていたが，21 世紀データになると他の二単身高齢者（3 階層）集団にほぼ 10％の差をつけて選挙情報の交換をしなくなった。[12]

全体をまとめると，超高齢単身者は，街頭演説会，新聞広告を好み，劇的なメディア政治の変化を好まず，選挙情報は選管からのものが多く，私的には情報交換をだんだんしなくなっている。単身高齢者ということでコミュニケーション範囲が狭く，権威主義的で，孤独な存在になりつつあるし，スピーカーで声高に叫ぶ「街頭演説」，ビジュアルな情報が中心となる「新聞広告」という十分に年齢に適合したものである。



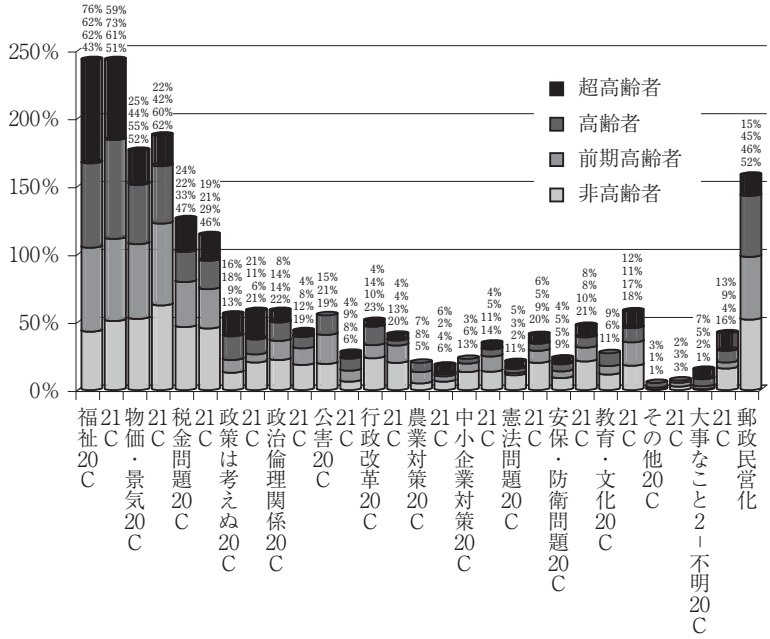
(12)　単身者の職場接触等はほとんど関係が出てないので省略した。

## 第五章　単身者の争点関心

超高齢者の争点関心は，他の単身者と比べて如何なる特徴を持っているのか，に言及しておこう。これは，「**図 21　単身者の争点関心**」に掲げている。

**図 21　単身者の争点関心**

| | 福祉20C | 21C | 物価・景気20C | 21C | 税金問題20C | 21C | 政策は考えぬ20C | 21C | 政治倫理関係20C | 21C | 公害20C | 21C | 行政改革20C | 21C | 農業対策20C | 21C | 中小企業対策20C | 21C | 憲法問題20C | 21C | 安保・防衛問題20C | 21C | 教育・文化20C | 21C | その他20C | 21C | 大事なこと2－不明20C | 21C | 郵政民営化 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 超高齢者 | 19 | 30 | 6 | 11 | 6 | 9 | 4 | 10 | 2 | 2 | 0 | 2 | 1 | 2 | 0 | 3 | 0 | 2 | 1 | 3 | 1 | 4 | 0 | 6 | 0 | 0 | 1 | 7 | 1 |
| 高齢者 | 73 | 107 | 51 | 58 | 26 | 28 | 21 | 15 | 16 | 11 | 17 | 12 | 16 | 5 | 8 | 2 | 4 | 7 | 3 | 7 | 6 | 10 | 11 | 14 | 4 | 2 | 4 | 12 | 9 |
| 前期高齢者 | 89 | 118 | 80 | 117 | 48 | 54 | 14 | 11 | 20 | 22 | 31 | 14 | 14 | 23 | 12 | 7 | 9 | 20 | 2 | 16 | 7 | 18 | 9 | 31 | 2 | 5 | 2 | 8 | 15 |
| 非高齢者 | 89 | 67 | 108 | 91 | 99 | 61 | 26 | 26 | 45 | 22 | 39 | 7 | 48 | 23 | 10 | 7 | 27 | 16 | 18 | 23 | 18 | 25 | 23 | 21 | 1 | 3 | 1 | 20 | 12 |




七六

### ⑴　単一争点派

超高齢者は福祉争点を掲げ，20 世紀時代は殆ど 2 位以下の争点に 3 倍ほどの差をつけて福祉に集中している。例えば，20 世紀では福祉が 76％，第 2 位の物価・景気が 25％と飛ぶ。倍率として 3.04 倍である。それに対して，高齢者は 2 位は 44％，前期高齢者が 55％，非高齢者が 52％とあまり 1，2 以下が離れていない。21 世紀になって高齢者が福祉を伸ばしたが，それでも第 2 位の物価は第 1 位の半分以上である。単一争点派といえるだろう。

### ⑵　その他の争点との関係

超高齢者はある程度まで争点の言及はあるが，それも物価，税金までで，第 4 位に「政策は考えぬ」が約 20％で来，それ以下の争点がほとんど 5 ％の程度まで縮小する。それに対して，高齢者は，行政改革辺りまでは 10％を超えている。いわば，超高齢者の争点の形は，第 1 位の争点，第 2 位，第 3 位，は一応あるのだがその形状は階段状だし，第 1 位以外は数も少ない。高齢者，前期高齢者の場合は，争点言及の少なくなりかたは漸次的である。

### ⑶　特殊な争点

この争点では，かなりの調査の回数聞かれている争点項目が掲げてあり，特定の選挙の時だけ問題となったいくつかの争点ははずれてきた。この場合，日常的には動きの少ない超高齢者の争点態度をみて即断するより，特定選挙の特定争点を取り上げて判断した方がいいだろう。

取り上げた争点は，2005 年選挙の郵政民営化問題である。グラフでは，一番右側の棒にあたるが，あれだけ社会をゆるがせた問題を反映して，高齢者までは 45％を超える関心が集中していた。ところが，超高齢者になると，第 4 位以下の 15％（実数は一人）しかなく，郵政民営化問題からも孤立していることが分かるだろう。

## おわりに

以下，単身超高齢者の20世紀から21世紀にかけての特徴の変化等をまとめておこう。まとめ方として，第一に，超高齢者を取り巻く環境の影響，第二に，超高齢者として政治・選挙環境に主体的にかかわっていく面での特徴，を拾い出しておこう。[13]

第一の環境に規定される面であるが，SES的特徴では，男女の平均年齢の違いによって主として超高齢者の問題は女子の問題であった。持ち家率では，21世紀になると若干率が上がった。それは同時に単身高齢有職者が増えてくることにも支えられている。都市規模別では，大都市部では割合の増加はとまっているように見え，むしろ郡部でまだ増加中である。

人間的環境を表すものとしての集団加入は，全体として地域団体等は凋落がはなはだしく「加入無」の増える原因を作っているが，一方老人会は強く超高齢者に，弱く高齢者に，強健なボランティア組織であることをしめしている（孤立）。

第二に政治・選挙環境との関わり方では，投票行動においては，投票率が年齢とともに逆U字型から逆L字型に変わり，そこには投票率を変えない超高齢者の果たす役割が大きかった。また，投票以外の参加でも同様の傾向が見られ，超高齢者の関与が大きい。

単身超高齢者の場合，他の高齢者（3階層）を押しのけて自民であったが，最近若干社会・民主系的であるが，しかし非支持なしである。

政治コミュニケーション上の環境として，超高齢者は，「言論による選挙運動」においては街頭演説会を一貫して歓迎している唯一の階層であり，また，連呼・電話を毛嫌いしている人たちでもある（孤立）。

文書による選挙運動では，超高齢者は，ビラ，ポスターを嫌い，その代わりに新聞広告が重要な代替物となっている（孤立）。



---

⒀　他と区別されて顕著な場合孤立の言葉を入れた。

メディアを通した選挙運動では，超高齢者は劇的なメディア政治の変化には加担はしていない（孤立）。

また，超高齢者は選管関連の情報に依存を示していた（孤立）。

血縁・地縁・友人とのコミュニケーション上の距離を示すデータでは，20 世紀データでは超高齢者は他の 3 集団に劣らず選挙情報接触をしていたが，21 世紀データになると他の二単身高齢者集団に差をつけて選挙情報の交換をしなくなった（孤立）。

争点意識では，超高齢者は，福祉をいう単一争点派で，第 2 位以下の争点とは 3 倍くらい離れて減衰しており，かつ時局的な争点とはあまりかかわらない（孤立）。

以上，2005 年現在までの超高齢者は，特に政治コミュニケーションと争点意識で孤立を選びとっているといえるが，少なくとも一部は介護者が十分意識して関われば解決できるものである。[14]



⒁ 「選びとる」のは多くの場合，二人だけの場合は彼らの意志によったのだろうが，単身になるときは死亡など意志ではない。その原型は一世代同居の超高齢者にある。すでに清書もすんでいるので『香川法学』に掲載の予定である。タイトルは，「「孤立」から自立へ－20 と 21 世紀高齢者と長寿変数」である。